洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

教育雑感

金沢工業大学教授
昭和九年卒　篠原一恭

「先生

大学在学中はいろいろご指導有難うございました。お蔭様で故郷では一流の会社に就職がきまり、いまは社内研修をうけております本当にいろいろ有難うございました。これも先生のご指導のほかないと思っています。今後はそのご恩に報いるためにも、金沢工業大学のためにも一心を以て社会人として務めるつもりです。

卒業に際し一ことお礼を申上ます」

これは昭和四十八年二月二十四日、金沢工業大学第五回卒業式の日に、関東出身の卒業生が私に托した手記の抜粋ですが、退廃的で反抗的なムードの多い学生の中にあって清らかなものにふれ、すがすがしい気分にひたったことでした。

私は三十数年間を電力会社の現業で過ごし定年退職後金沢工業大学につとめておりますが、学生諸君に直接触れることになって、若者のものの考え方や態度が以前に比べて予想以上に変っていることにまず少からぬとまどいを感じたものでした。

このままで学生が社会へ出た場合にはたして一人前の人間として受け入れられるのか？うまく人と折り合ってやって行けるのか？はやく何とかしなければならないというもどかしさを感じながら、一人でも多くの学生がエンジニアとして備えるべき基礎知識はいうにおよばず、根性と礼節とを備えた幅の広い立派な人間として生長していくことを念願している昨今です。

金沢工業大学は創立以来八年余の新しい学校ですが幸いなことに学内のゲバさわぎは一度もありません。学生の騒じょうの原因の一つに教師と学生との触れ合いのないことがあげられることが多いが、本校では在学中年に一度は必ず二、三泊で能登半島風光明美の地にある金沢工大穴水湾自然学苑で研修することになっていて、ここでは教師と学生はともに入浴し、食事し、談笑し、議論する仕組みになっております。このことは人間対人間の触れ合いというものに或る程度貢献していると思います。もちろんこれだけで十分な対策だとは申せませんが。

人間、いくら金銭や物量に恵まれていても人格的に劣悪な人は尊敬に価しません。今の若者に欠けているのは精神面の豊かさであり最も望まれるのは道徳的能力だと思います。

ところが、学校教育法では小学校、中学校、高等学校を通じて精神面の開発で何が行なわれているでしょうか？道徳を否定し、独善的で反抗的な利己主義に陥りやすい個人主義をひたすら吹き込み、混乱と破壊と虚無とに若者を追いやる結果となっているのではないでしょうか。

ここでかってのレッドパージのことが想い出されます。終戦後の混乱のとき、産業界が相次ぐ狂暴な労働攻勢をうけて経営者による自主経営が危殆に瀕したときに、占領軍の政策としてレッドパージが打ち出されました。

電力会社もご多分にもれずその洗礼をうけ、自分の職場からも何名かのものが追放されました。この事件はあとあとまでいろんな形で問題を残しましたが、ともかくこのことによって産業界は一応の立ち直りを見せはじめたことは確かです。ところがそのとき教育界だけはレッドパージをまぬがれたのであって、当時識者間で十年二十年後には大変なことになるぞといわれていたものです。その予想は不幸にして的中したのでした。

幼児期から始まる教育の基本は家庭にあります。ここに両親のしつけが重大です。先生のいいなりに放置しておいて何か問題がおこると学校が悪い、世間が悪いなどといいなすのはひきようというものです。

高度な福祉社会は世界各国がその目標として追求すべき理想境でありますが、それは決して金銭や物量のみで購えるものではありません。各自が道徳的に目ざめ、人間相互の信頼に基づいた諸活動をするのでなければわれわれの家族、地域社会、日本民族、全人類の繁栄はあり得ないと考えます。

人間のバックボーンは二千数百年このかた諸賢聖によって啓示され、発展され、われわれの父祖にいたるまでうけつがれてきた道徳倫理にありと信じます。（終）

テクノロジー・アセスメントについて

（財）山陽技術振興会専務理事
昭和10年卒　天野宗明

最近、新しい言葉が次々に登場してきまして、テクノロジー・アセスメントもその一つに数えられると思います。略してT・A・と云われていますが適当な日本語はまだありません。トランジスタが日本語のない儘現在通用していますように、テクノロジー・アセスメントも近い将来その儘理解され活用されるようになると思います。

以下テクノロジー・アセスメントの概要について述べたいと思います。

テクノロジー（Technology）は技術ですが、アセスメント（Assessment）は辞書を引けば評価と訳してあります。今日、企業の幹部に対してあなたの会社では技術評価をして居られますかと質問しますと、すべての人が「勿論やっていますよ、うちの開発した技術はどのようにすばらしく、その製品はどの程度市場で売れて、その収益はどの位になるかと充分予測評価しています」との答が返ってきます。一方現状を見ますと公害など社会に対して悪い影響が出てきて大問題となって居ります。そこでどうしてこのようになるのか、技術評価に不充分な点はなかったか反省して見る必要があると思います。すなわち今迄は企業は経済性、収益性の狭い範囲で技術評価をしてきましたが、今やもっと広く、社会とのかかわりにおいて検討評価しなければならなくなってきました。又法規などで強制されてはじめて改善するのではなく、事前に企業自身が技術から又製品から生じる悪い影響を予測、評価して改善のための手を早く打ち、技術の完成を目ざすことが必要となりました。この悪影響の予測、評価には新しい手法や、広い範囲の専門家が必要となってきます。

テクノロジー・アセスメントが始めて提唱されたのはアメリカで、一九六七年下院議員であったエミリオ・Q・ダダリオ氏が科学宇宙委員会に対してテクノロジー・アセスメント法案を提出したのに始まります。一九七二年には法案が成立し政府にアセスメント局が設置されて、技術の利用に伴って生じる悪影響（マイナス・インパクト）を検証・検討し、議会の政策判断に役立たせるようになりました。法案が成立するまでにもテクノロジー・アセスメントは各方面で活用され、あの世界一の好きなアメリカ人が悪影響が多いとして超音速機の開発を中止したことは良い例と思います。日本では一九六九年秋に伝わってきて、公害の多い日本に於いてこそT・Aが必要と科学技術庁、通商産業省をはじめ各省でケース・スタディを行なうとともに普及推進に力を入れて居ります。中国・四国地方ではこの十月六日岡山市に於いてテクノロジー・アセスメントの推進をテーマに科学技術振興会議が開催されることとなっています。

有識者八人によるテクノロジー・アセスメントの提言が中央公論（Vol. 9, No. 4, 1970）に出て居りまして、良い参考になると思いますので引用して拙稿の終りといたします。

テクノロジー・アセスメントの提言（八人委員会）中央公論、経済問題特集号Vol. 9, No. 4, 1970より

一、技術発展は人類の進歩と同義語ではなくなった。技術開発に当っては、その可能性の推進だけでなく、人間、自然、社会への影響を制御する方策の検討をも同時に同じウェイトで実行すべきである。テクノロジー・アセスメントはこれを基本原則とする。

二、地球の大きさは有限である。地球という惑星生態系の長期的な維持、発展を期するため、在来の生産と消費を中心として技術に、排出物処理の技術を加えた循環完結の技術体系と地球有限の認識に基礎をおく資源節約型の技術を開発すべきである。

三、政府、民間企業を問わず、いかなる組織体でも、より多次限、より長期的な利益の実現を基本として政策や計画を選定すべきである。そのためには、個別の組織の枠を越えた「脱省庁化」「脱企業化」への転換が要請される。とくにテクノラートは、その方向で連帯の実現に努力すべきである。

四、人類の諸活動はいまや地球規模の相互依存を深めてきている。したがって事前に予測、評価、警告を行なうための国際的な協力組織の成立を促進しなければならない。

五、効率中心の技術進歩が人間疎外のあらたな原因となりつつある。人間尊重を最高の原理とし、共存する人間が生き甲斐を感ずるような環境の維持と発展に寄与すべきである。

祇園祭とお稚児さん

（財）関西電気保安協会
昭和10年卒　中沼保三

大正十一年の夏、私が、日本三大祭の一つである京都の祇園祭で、長刀鉾の稚児をつとめた、五十年前の淡い記憶を許されたい。

私が小学校一年生のときより、茂山社中として大蔵流狂言を習っていたことに由来する。長刀鉾の稚児の世話は、一切大蔵流狂言の家元の、茂山師匠が世襲で受持っていられた。

私は狂言、靱（うつぼ）猿の子猿の役で、茂山師に方々の能楽堂へ連れられたことから、十一才としては小柄な私に稚児として、白羽の矢が立てられたものであろう。長刀鉾町は四条通の東洞院と烏丸の間の、両側の家並の町である。この町は、毎年祇園祭の主役である長刀鉾を建て、稚児を鉾の正面に乗せて十七日の神幸祭（前の祭）に、山鉾の巡行の先頭を切って進むのがならわしで、長刀鉾はくじ取らずといわれる。この町内では、輪番で稚児番と禿（かむろ）番とが回ってくる。禿とは、稚児の両側にかしずくお供役で、十二、三才の子供である。当番の家に子供がいないと、他家より仮養子を迎える。私も稚児番の主人と、親子の固めの杯ごとをしたように思う。しかし、夜は家に帰ったし、小学校も自宅から通学したので、いわば通いの養子である。

稚児の間は、女人の作った食物は口にしないことになっているが、自宅では母親の用意したものに必ず、火打石で切り火をして清めたものである。また祇園祭の紋は胡瓜帽額（きゅうりもこう）である。これは丁度、胡瓜を輪切りにした形をしているところから、祇園祭の間は胡瓜は絶対食べられなかった。祇園祭は、京都東山の八坂神社の祭で、正式な行事は七月一日の「吉符入り」から始まる。稚児は鉾町の会所の二階で、外部に対して初の顔見世をする。囃子（はやし）方も一日から、鉾町の会所

の二階で、囃子のけい古を始める。稚児は、毎日円山公園北林の馬場で、馬に乗って歩くけい古をする。二日に市役所で、山鉾の巡行の順をきめる「くじ取り」の行事がある。十日の夜は、「神輿（みこし）洗い」がある。三基の御輿の一つが、四条大橋の上までかつぎ出されて、加茂川の水を汲みあげて御輿を洗う。

十一日は「稚児社参」の日、稚児は、体を清めてから、顔に固ねりの油を地にして真白く白粉（おしろい）をぬり、くちびるに紅をさす。全くの人形の顔そのものである。そして衣冠束帯の姿となる。支度ができると、稚児番の家を出て、飾られた馬に乗り、禿二人と町内役員や親類縁者を従えて、四条通りを八坂神社へ進む。神社の正門よりはいって、神前で儀式があり、ここで稚児は正五位、十万石の格式の大名に相当する位（くらい）をもらうことになる。これを「お位もらい」という。昔は、この日から女人には全然世話をさせなかったようである。翌日からは毎晩、八坂神社へおまいりするが、その時の姿は、やはり厚化粧をし肩衣と袴（はかま）の裃（かみしも）姿で、頭には蝶トンボをつける。また、神幸祭当日、鉾で舞う舞のけい古を、腰持ちの人にしてもらう。十一日は、各鉾町で会所の前の道路に鉾が建てられる。鉾建は、角木材の四角の櫓形の骨組から始まるが、釘類は一本も使わず、すべてわらなわで縛って組立てられる。次に鉾の心木が中心に立ち、車輪の心棒が下部の前後に取付けられる。車輪の心棒の太さは直径三〇糎位のものである。鉾の心木は長さ三〇米位で、その先に各鉾の特長がある。

長刀鉾は、長刀の刃先がついているが、鉾建のときは刃面が南に向けてある。北向きにすると京都御所に向うのを避けている。

函谷鉾は、三角のうろこ形の上に月形をつけており、月鉾は月形だけである。放下鉾は須浜の形にしているので、一名須浜鉾ともいう。

船鉾は、鉾全体が船の形をしている。神功皇后（じんぐうこうごう）の、三韓征伐（さんかんせいばつ）のときの船を形どったという。

ほかに鶏鉾があり、十数年前に菊水鉾が復活されている。変っているのは岩戸山で、これだけは曳山（ひきやま）で、鉾上は松である。

鉾建は、次に木を組み合わせて造った直径二米位の四つの車輪が、挺子（てこ）の応用でつけられる。そして屋根がつくと、骨組は完成する。

この上へ胴掛、腹掛、見送りなどの織物と長押（なげし）の彫刻や天井がつけられて、外観が飾られ鉾が華麗に仕上る。胴掛、腹掛や見送り（鉾の後部全面にたれ下げる織物）には、外国の歴史、風俗を織りこんだゴブラン織や綴錦があり、月鉾の彫刻は左甚五郎の作であり、天井の絵は円山応挙の書いたものである。鉾が建つと「車掛け」といって、鉾の曳き初めが行われる。それからは毎晩、囃子方は鉾の中で囃子のけい古をする。夜は鉾の前後に提灯（ちょうちん）を縦につらねた列を、数列つり下げてあかりを入れる。その光景は美事である。鉾のほかに「山」が十余りある。いろいろの故事にならった人形が飾られ、その背面には必ず赤布で造った半円の、山の上に松が植えられている（これは十七日だけ）。山の枠組は十四日に行われるが、夜は山の前後に鉾と同じように、提灯の列がつるされる。稚児は、毎晩順に全部の鉾や山の町内に、あいさつ回りをする。

十六日の夜は宵山（よいやま）といい、大変な人出で、四条通も諸車通行禁止となる。燈の入った提灯の列を前後につるした鉾の中より祇園囃子の聞こえてくる風情は、まことにゆかしい情緒（じょうちょ）をただよわせてくれる。鉾と会所の間は渡り廊下でつながれており、昔は女人は絶対に鉾の中はもちろん、この廊下へさえも入れなかったが、近年は女人禁制も解かれている。祇園祭は一名、屏風（びょうぶ）祭と言われるが、宵山の日に氏子の旧家が秘蔵の屏風を立てならべて、客を接待し一般にも公開する風習となっているからである。鉾町では、お守りや粽（ちまき）を売るが、山町では、子供達が神幸祭当日に、山に乗せて巡行する御神体（人形）にささげる、ローソクの寄進を求めて、口調面白く「ローソク、一丁献じられましょう」と唱える。

各鉾の囃子は、いずれも鉦（かね）、笛、小太鼓の三つであり、鉾の中では鉦方の子供連は右側に、笛方の中年男達は左側に、両足を鉾の桟（さん）にくくりつけている。小太鼓方は二人が左右に向い合っている。囃子の曲は、どの鉾も大体同じであるが、どこかに少しずつ違うところがある。けいこ中に、先輩格より後輩へと教えつがれていくが、楽譜がある。鉦の譜面は至極簡単で、子供でも覚えやすい。鉦の真中をたたく「カン」は▲で、縁をたたく「チン」は○で示されている。

十七日は、神幸祭である。この日は毎年不思議に、巡行の出発前に小雨がパラつくそうで、巡行道の清めの雨と伝えられる。稚児は早朝から稚児番の家で、斎戒沐浴（さいかいもくよく）して身を清め、顔の厚化粧を終ると昔から使われている、神幸祭用の衣装を着る。支度ができると九時前に、四条烏丸まで引き戻されている長刀鉾の、正面に立てかけられた長ばしごを、稚児かつぎの右肩に肩車されて登り、鉾に乗りこむと正面に正座する。四条通は、諸車通行止めで見物人に開放される。九時に、山鉾巡行のスタートが切られる。長刀鉾の前面に乗り立った二人の音頭取りの「ヨーンヨーイエンヤラヤノヤ」の掛け音とともに、振り出される紋入りの扇子を合図に、鉾は曳（ひ）き綱二本に分れた、曳き子約三十人程で動き出す。稚児は、最初の舞を始める。禿は、稚児の舞に合わせて、金の団扇（うちわ）で稚児の前を払い清める。囃子は地味な地囃子で始まる。鉾と鉾の間には、山が三つずつくじの順に入って、すべての山鉾が動き出す。山は人足が十数人でかつぐ。曳き出された鉾は、時々前輪の前に車止めの、木のブロックを当て止める。そして、音頭取りの合図でまた鉾が進み出す。鉾の下にも人がいて、鉾を真っすぐに進めるために、前輪の前横からカブラ形の木を、車輪

の下にかませて車を横にすべらせ、鉾の向きを修正する。くじ取らずで先頭を切る長刀鉾は、やがて御幸町にさしかかる。ここには南北の両側の家の間に、しめなわが張られている。稚児は佩刀（はいとう）をぬいて、一閃（いっせん）このしめなわを切る。他の山鉾には、四条堺町にくじ改めの関所があり、その年の京都市長が、鳥帽子（えぼし）直衣姿で、くじ改め役をつとめる。山鉾がそこへさしかかると、町の役員の一人が、それぞれ特長ある振りをして、文箱の中に入れた順番札を、くじ改め役の前にさし出し、くじ順の確認を仰ぐ。そして山は、その前で三回まわる。長刀鉾が寺町通に着く頃には、四条通の北側は山鉾の行列が延々と一線になり、誠に壮観である。両側の家は、二階の表側を緋(ひ)の毛せんなどで飾り、親族縁者の観客を招待している。四条通の南側の車道まであふれた一般観衆は、鉾より投げられる粽を拾わんと必至である。鉾の粽を持ち帰り、家の出入口の上につるしておくと、魔よけのマジナイになるといわれる。当時は、四条寺町の角で、鉾は進路を南向きに曳きかえた。前輪の両方にも曳き綱を加え、細長く割った竹片を平らに敷き、音頭取りの音頭に合わせて前輪を、割竹の上をすべらせて横に曳き、鉾を南向きにした。音頭取りの扇子は、この時は左から右へ振られる。動くたびに鉾は相当ゆれるが、すべて、わらなわで骨組を縛ってあるため、弾力性を持っている。すっかり南向きになった鉾は、はずされている電車線の間を、囃子とともに寺町通を南下した。この辺りから囃子は、にぎやかな曲になってくる。稚児も随所で舞を舞う。松原通に近くなると、町幅が狭くなっている。そこで鉾の屋根上にいる人は、鉾の屋根が家の軒や電柱に当らないように気を配る。いよいよ、一番難所の寺町松原の町角に来る。ここは鉾の前後ぎりぎりに、家角の間を巧みに、松原通へ西向きになる。東洞院の手前で、午前中の巡行は一時中止され、昼食となる。午後の巡行は、戻り鉾といって囃子のテンポも一層早くなる。長刀鉾は、新町通を北進して四条通へ出、東進して鉾町に帰る。どの山鉾も、自分の町内へ帰って、昼の巡行祭は終る。町内へ帰った鉾は、すぐ飾物をはずされて骨組だけにされる。そして翌日に全部解体されて、各町の倉庫に格納される。近年は各町内で保管が困難になり、円山公園の一角に保存庫ができている。十七日の夜は、三基の御輿の渡御がある。八坂神社を出て、四条寺町の御旅所に二十四日の還幸祭（後の祭）まで鎮座される。祇園の芸者衆が無言詣りをするのもこの間である。自家を出てから御旅所にお詣りし、家に帰るまで一言も物を言わなかったら、願いごとがかなうと言われている。後の祭には鉾はないが、上（のぼり）観音山と下（くだり）観音山の曳山が二つあり、囃子方を乗せて巡行する。鉾先はやはり松である。山も十近くある。稚児は、後の祭の山町へも順次お詣りに行く。二十四日は、上観音山を先頭に、各山がくじ順につづき、下観音立を殿（しんがり）として巡行した。十数年前より、祇園祭が京都市の観光行事の一つとなり、二十四日の巡行分を十七日に繰り上げ、巡行路も四条通、河原町通、御池通、新町通に変更されている。疎開で広くなった御池通には、有料の観覧席を設けている。二十四日の夜は、御旅所の御輿が氏子の区域を巡行して、八坂神社に還幸するが、その前の行列に稚児も乗馬して参加する。戦後、いつの日からか鷺舞が復活しているが、西国地方の祇園会に伝わって残っていたものである。二十八日に再び御輿洗いの行事が四条大橋の上で行なわれ、祇園祭は終るが、その時に稚児は八坂神社で受けた御守りを、加茂川に流して位を返上し、稚児のつとめも終ることとなる。

以上は、五十年前からの記憶をたどって自分本位に書いており、書き足りなかったり、思い違いをしている点があるだろうし、このほかにもいろいろの行事があるが、それは他の書物にゆずることとしよう。

ホリディイン　あれこれ

昭和27年卒
中央設備エンジニアリング　遠藤　茂

去る七月十四日京都高野橋の近くに、ホリディイン京都がオープンした。九階建の建物に百五十の客室、レストラン、宴会場、プール、アイススケート場、ゴルフ練習場等が包含され、広い駐車場とボウリング場が附随している。

このホリディインとは、世界最大のホテルチェーン組織で、米国を主体として三十数ケ国に約千五百のフランチャイズホテルをもち（一部直営もある）、部屋数は延二十四万室にも及んでいる。一九五二年に第一号店が開業したが、この十年位で飛躍的に増加し、米国内ではホリディインのない町はない程である。標準化されたレイアウト、大きいベッド（巾は一三五糎）と広い客室により、ゆったりしたくつろぎを提供し、十二才未満の同伴者は無料にする等、家族旅行向の親しみのあるホテルである。又ホリデックスなるコンピューターを導入し、予約の迅速化をはかり、電話受付センターも設けられ、便利さに一段と寄与している。

昨年伊藤忠商事と提携し、日本へも進出する事になり、その第一号店が京都に開業した訳である。私の会社も、この国内でのチェーン展開に建築設備の分野でお手伝する事になり、打合せと視察のため渡米しました。

ホリディインの本部は、テネシー州のメンフィスにあり、ホリディシティと名付けられ、ここにはフランチャイズ店に対する各種の施設が完備されている。経営相談・指導教育をする部門や、建設の基準を用意し地域や環境に応じた標準設計をする部門もあり、更に各種のモデルルームや、内装材料・家具什器から消耗品に至るまで、あらゆる機材を集めた広い展示場があり、又統一した宣伝ポスターや伝票類のための印刷会社も出来ている。つまり、加盟店を経

営しようとする人は、土地と信用さえあれば身体一つでホリディシティへ乗り込めば、開業迄の全てを指導斡旋してくれる訳である。前記の展示室の機材は、一括大量発注により割安に入手出来る様で、ホリディイン以外のホテル経営者も利用する場合があるそうだ。

建設基準の中で特に議論の対象になったのは、㈠扉等の大きさ（体格の差）、㈡方位や個人感覚に差があるので、冷房と暖房が自由に選択出来る設備（冷水と温水を常時循環させておく）、㈢車椅子を利用する身体障害者用の特殊な室（扉の巾を広くし、スイッチや洗面器等を低くする）、巾広の駐車場所、スロープ通路……等で、考慮すべき点があった。

又ホリディインの総合案内書が発行されており、名称・場所・施設内容・宿泊単価・略図等が印刷され、幹線道路沿いのもの、都心のもの等自由に選ぶ事が出来、一般旅行者にも家族観光旅行者にも非常に便利になっている。宿泊単価は一ベッドルーム、一人十二～二十八ドルである。

多店舗化によりどこにでもあり、予約も簡単という便利さが、最大の武器だと思う。

以上簡単ですが、見聞記を兼ねて、ホリディインを紹介します。

洛友会員だより

昭和6年卒
洛友会幹事　山本茂雄

長年洛友会の幹事をしました関係で多くの先輩や若い後輩の方々に御目にかかる機会を得見聞を広めることが出来常に感謝して居ります。

洛友会は電気専門の方々が大多数を占めて居りますが、中には電気と全く関係の無い仕事をせられ活躍せられて居る方々もあります。

最近会員の中に境遇の変った異色の方より消息を受けましたので、その一二を御紹介申し上げます。

その一人は昭和十一年卒の桜井八太郎氏のことで、氏は現在全くの盲人となられ不遇の御境遇ですが、これを動機に社会福祉普及会を創設せられ総合的な社会福祉の普及を目的とせられ、自宅を事務所として此の仕事に専心して居られます。私は数年前林重憲先生の御紹介により初めて桜井氏御夫妻に御目にかかり同氏の切々たる御抱負に感動した。又全盲の桜井氏を助け社会事業に献身せんとする夫人に心よりの敬意を表するものであります。氏は既報（昭和四十七年六月号）のなかにその抱負を述べられて居りますので御承知の会員も多いと存じますが、此の様な仕事は一人でも多くの支援が必要と思いますので、有志諸兄の御激励と御支援を賜わる様御願い申し上げます。会則その他は左記に御問合せ下さい。

京都府乙訓郡長岡京市長法寺
芝端二十一の五
社会福祉普及会（桜井八太郎）

次に御紹介するのは電気工学講習所出身の方のことです。若い会員の方は御存知無い人が多いと思いますが、故青柳栄司博士が遺された仕事に青柳研究所（現在応用科学研究所、理事長吉田洪二）、電気評論（現在電気評論社、社長松田長三郎先生）と電気工学講習所の三つが挙げられます。電気工学講習所は戦時中立命館大学に合併され戦後は廃校の形となり、その卒業生は洛友会員として登録され現在全国にまたがり、その特色として独立経営をして立派に成功して居る方が多い。中心的役割を受け持って何時も同窓会の世話役をして頂くのは関西（京都）の立石亨三氏（大正五年卒）、東京では井上弥三郎氏で、何れも壮者を凌ぐ御元気さに感服して居ります。

私は数年前、講習所の同窓会（大阪）に出席した際、テーブルスピーチをされた中山豊吉氏（大正七年卒）が余りにも若々しいので、その年令を尋ねた所八十才に近いとのことで驚いた。同氏は最近わざわざ堺から京都の応用科学研究所を訪ねて下さり、その健康の秘密を話して下さった。

中山氏は静岡県の農家の出身であるが、幼時これからは電気の世の中になると思い、東京の電機学校にはいり苦学せられたが、卒業後更に上級学校に学びたいと考え、京都大学の夜学電気講習所にはいり卒業後当時の宇治川電力㈱に入社した。同氏はその頃から祖父が趣味として愛好して居た蘭鯖の研究に取りかかり、爾来四十一年にわたり研究とその神秘的効用の普及を続け、現在は理学博士で日本蘭鯖協会審査員で自宅に於て中山生化学研究所長として、蘭鯖の効用の普及に専心して居られる。同氏によれば従来医者に見放された重病、例えば肺結核、胃癌でも此の蘭鯖療法により完全に健康体に回復することを幾多の実例で立証した。中山氏は明治二十六年生れであるから現在八十才になられるが、一見して五十代の若々しさで同氏の療法に頼って居る患者が八〇〇名に達し、朝五時から夜十一時迄寸暇も無く働いて居ると言う超人振りである。

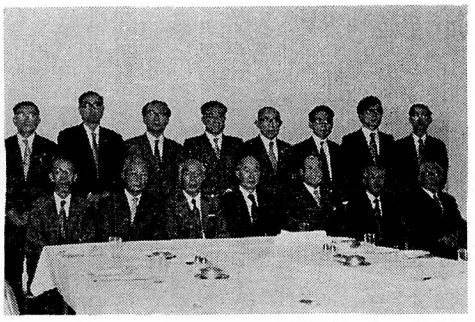
氏は鳥養先生に長生きして貰わねばならぬと思い、長年の研究の秘薬をわざわざ持参して頂いた。

洛友会員は現在四〇〇〇名を越えた大世帯になり、職業も極めて広範囲にまたがって居るので、今後会員の方々より会報に面白いニュース等をどしどし御投稿して頂くことを期待する次第です。

洛友会東北支部 第八回総会報告

第八回東北支部総会は六月二十三日杜の都仙台市の仙台共済会館に於て開催された。

本部より田中教授をお迎えし、



平井支部長をはじめ十四名のご出席があった。

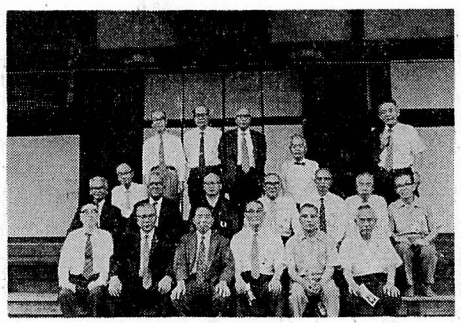
議事に先立ち、当支部発足以来いつもにこやかに姿をお見せになる内田副支部長が総会の直前六月十四日、六十一才の若さで急にお亡くなりになったことが報告され、平井支部長の音どで再びお目にかかれなくなった内田副支部長の、過ぎし日を想いうかべながら、黙祷を捧げ、ご冥福をお祈りした。

続いて総会の議事に入り、副支部長の後任には東北大二村教授を推挙した。

田中先生より教室の近況をお聞かせ戴き、三国幹事より平井支部長の勲二等旭日重光章叙勲について、お祝いの言葉があり、総会は滞りなく終了した。

ついで、田中先生より「半導体工学の進歩」についての講話を戴き、半導体の進歩のめざましさは驚くばかりであった。

引続き懇親会に入り、山下先輩の音頭で乾杯し、昔の思い出話から、次第に日本の将来を憂える話となり、これからが聞き処と言うところで時間となり、名残りを惜みつつ散会した。



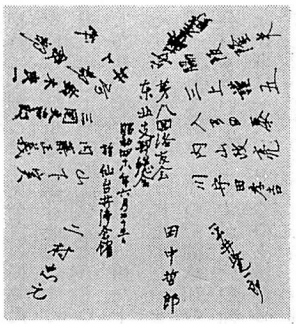
講大正十四年度クラス会

講習所大正14年卒
管灯電材(株)社長
入沢　益一

入学から五十年、齢も古稀、区切りが重なった年となったので、六月三十日有志相寄りクラス会をもった。まだまだ娑婆気の強い連中ではあるが、一応殊勝にも花園妙心寺塔頭の衡梅院に集合した。集まったもの東は東京から西は宇部までの各地から、安藤房吉、石田幸三郎、入沢益一、内田沢二、大槻敏夫、鎌田軍一、上条一太郎、坂田栄、塩見謙一、那須征露、中西真雄、野々口守、蜂矢二郎、初田清、森芳郎、森田福市、山崎惣三郎、吉田寛一の諸君白髪、禿頭黒髪とりまぜて十八名。衡梅院で各自自己紹介の後、白坂先輩の墓前に詣で、住職東海石門師の御案内によって塔頭天球院で、狩野山楽、狩野山雪の筆になる非公開の国宝を拝観後、妙心寺本堂、法堂に参る。記念撮影に全員よろしくポーズをつくったが、フイルムの入れてないカメラであった。これは恍惚のせいではなく、ユーモアであった。宿泊所大心院で妙心寺本山あじろの手で造られた名物精進料理で懇親、懐旧談や家族紹介などに夜を更かす。

翌七月一日午前六時三十分から妙心寺管長導師の法要に参列、静寂な山内の空気が一入身にしみた。大心院津田宗徹師の話をきいて朝食、全員今後も一層の精進を覚悟した。

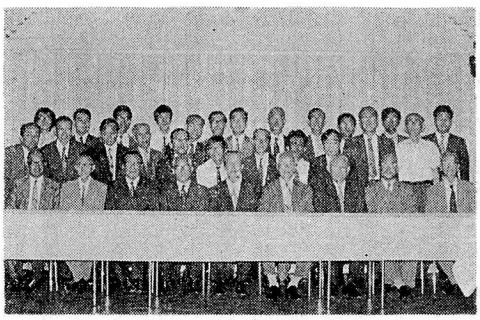
つきない話のつづき、寄せ書などして、名残りをおしみつつ、再会を約して散会した。

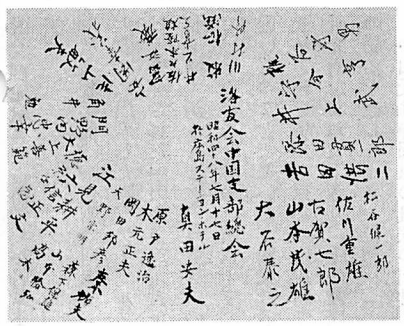


中国支部総会

中国支部では七月十七日午後六時より広島駅六階のステーションホテルで四十八年度総会を開催した。

当日は本部より大谷、吉田両先生ならびに山本幹事をお迎えして中国地方各地に散住する百三十余名会員のうち、遠くは倉敷、徳山からの参加を得て出席者二十九名の盛会であった。





真田支部長の挨拶のあと、大谷先生、山本幹事から教室および本部の近況をおききし、梶谷幹事の司会で四十七年度会計報告他一連の議事を満場一致で承認し滞りなく総会を終了した。引き続き別室で懇親会に入り、先生方をかこみ夜の更けるのも忘れ愉快なひとときを過した。

訃報

昭22　山中精一郎
5　中島　武平　48・8・4
明37　中川　憲郎　48・8・26

以上の方々がご逝去なされました。謹んで哀悼の意を表します。

関西支部家族旅行会秋の嵯峨野散策と高雄へ

期　日　十一月十八日（日）
集　合　京都駅　午前九時
コース　嵐山清涼寺（釈迦堂）
講話・拝観・昼食の後
嵯峨野散策
（西山パークウエイ）
高雄
解　散　京都駅十七時三十分頃

講話は清涼寺住職（前京大人文科学研究所長・京都国立博物館長）塚本善隆師に嵯峨野に関係深いお話をお願いしております。

散索には二尊院・祇王寺・念仏寺・常寂光寺・野宮神社・大覚寺・天竜寺などの寺社が近くにあり、紅葉も見頃の季節です。

支部会員には近日中にご案内状にてお伺い申しあげますので、奮ってご参加下さい。

（幹事・島津製作所森島・井上）